オオムラサキの生態は…

オオムラサキは、日本の国蝶です。タテハチョウ科に属し、エノキ・エゾノキ・クヌギ・クリなどの雑木林を住み家としています。最近は植林が進み、その生息地も限られてきています。

都留市では、小形山の稲村神社を初め市内数ヵ所でその姿を見ることができます。ではいったい、稲村神社を舞台にオオムラサキはどのような生活をしているのでしょうか。

七月に羽化したメスはまもなく交尾をすませ、八月に産卵をします。一回でおよそ百個程度の卵を生みます。卵は、約一週間でふ化し、その後二回の脱皮を繰り返し、八月下旬から九月初旬には三令幼虫に成長します。

九月中旬になると、三回目の脱皮を終え四令幼虫となった幼虫は、越冬の準備に入ります。今まで木の葉などに住んで生活をしていた幼虫は、木の根元にある枯れ葉の中で冬を越すため、一分間に約十センチメートルというスピードで木から降り始めます。このころになると幼虫の色は、いままでの緑から枯れ葉と同じ茶色に変化します。そして、寒い冬を枯れ葉の中ですごした幼虫は、五月初旬、越冬から目覚め木を登り始めます。

六月初旬になると幼虫は、終令幼虫となり、体長も八センチメートルほどになります。体色も茶色から緑色にもどり、六月下旬には、蛹となって成虫になる準備に入ります。こうして、七月には成虫に変わり、夏の空にその美しい姿を見せてくれるのです。

ちょうの見学

禾二小
六年　井上　秀子

私たちは、オオムラサキについて見学させてもらった。ちょうの食べ物は決まっていて、同じ種類のちょうや形の似ているちょうは同じ物を食べているのでおもしろかった。

幼虫の時のオオムラサキはなめくじみたいで気持ち悪かった。

茶色のさなぎは透明の羽が見えると言ったが、さがしても見つからなかった。

ちょうは羽の前の部分をきずつけると飛べなくなるなんて知らなかった。

私はちょうがたくさんいすぎると食物がなくなってしまうと思ったら先生が私と同じことを言ってくれた。

これからは幼虫や食物を大切にしなければきれいな花や動物を失ってしまうと思う。だから、そのためにも禾生第二小でオオムラサキの幼虫をかんさつしていきたいと思う。